

[書 評]

複数の歴史 『転回点を求めて——1960年代の研究』

〔富永茂樹編，世界思想社，2009年〕

森 本 淳 生

(一橋大学大学院言語社会研究科)

私たちは多くの場合、自分の生きてきた時代の意味を後になってから理解する。一般に同時代よりも過去の方が距離をとりやすく、種々の影響関係なども比較的俯瞰できるだけに、より明確な像を思い描くことが可能である。とはいえ、同時代に比べれば相対的に把握しやすい過去であっても、それを過不足なく捉えることはきわめて難しい。ポール・ヴェーヌは歴史とは物語だと述べたが、その意味は、数多くの事実の中に、ある一本の線を引くことなしには歴史を語るなどできないということであった。ひとつの事実を調べていくと、それは無数の事実へと分解してしまう。これは、いささかなりとも人文学的研究に携わった者であれば周知のことである。そうした無限を前にして、それでもなおその把握を目指すこと、大文字の唯一の歴史など存在しないことを十分に自覚しつつも、様々な次元で展開する複数の歴史にできるかぎり目配せをしながら、ある無限遠点に想定される〈総体〉にも思いを馳せること、——歴史を考えるとそうしたことはないだろうか。

1960年代を多角的に考察する本書は、まさにこのような意味での複数の歴史を対象としたものである。序論冒頭で1960年代を「あ

る終焉のはじまりの終了した時期、あるいは本格的な終焉が開始した時期」と考えることを提案する編者は、1610年のアンリ4世暗殺と1963年のケネディ大統領暗殺とを並置するスティーヴン・トゥルミンの興味深い議論を紹介することから話を始めている。ガリレオやコペルニクスの地動説、デカルトやベーコンの合理主義、ウェストファリア条約で規定された国民国家などとともに17世紀前半に始まった近代世界は、1960年代にその終焉の運命を決定的に明らかにした。近代的な枠組みは完全に終焉してしまったわけではないが、しかしそれに対する懐疑はもはや不可避免であり、われわれは何かが終わりを、何か未知のものが到来する予感を抱かずには生きていくことができない。編者によれば、こうした近代の終焉が不可避免であることを決定的に顕在化させたのが第一次世界大戦であった。国民国家は帝国主義的發展を通してその制度的矛盾を露呈し、科学は戦闘機、戦車、毒ガスなどを登場させもはや楽観的信頼の対象ではなくなった（その先にはもちろん核兵器や種々の化学物質、遺伝子操作などがあろう）。とはいえ、第一次世界大戦において近代世界は転回点を迎えていたのだが、しかしそのことが十分に認識されるには1960年代を待たなければな

らなかった。編者が1960年代にこだわる理由はここにある。

もちろん歴史の進展を考えるということで言えば、ヘーゲルやマルクスからは「近代の超克」座談会や京都学派の「世界史の哲学」まで、これまでにさまざまな変奏がかなでられてきた。世界の諸地域を歴史の発展段階に割り振り、そのことで歴史の一元的な展開を語るこうした言説は、しかしながら、本質的に多極化し多層化したものである近代世界を語るには無力であろう。本書の意義は、1960年代という限られた時期に視野を限定しつつ、それを複眼的に見ることによって、複数の歴史を浮かびあがらせていることにある。16人の論者による論攷は、〈生活〉、〈身体〉、〈意識〉という三つの領域に分けられてはいるが、それらをどのように結びつけて読むかはある意味で読者の自由に委ねられている。本書を読むことは歴史のさまざまな筋を思い描いてみることなのである。

例えば、「三種の神器」と呼ばれた冷蔵庫、洗濯機、テレビないし掃除機は60年代を通じて驚異的なスピードで普及し、本格的な消費社会が先進諸国に出現することになるが（疋田論文）、日本の60年代を性格づけるものである64年の東京オリンピックは、まさにこのテレビを通じて放映され国民的関心を集めた初めてのイベントとなった（半田論文）。他方で、テレビの普及は脚本家花登筐に活躍の場を与えるものでもあった。花登は多くのテレビ・ドラマで一世を風靡したが、京都が舞台の『柚子家の法事』には大阪企業の東京進出、若者の大学進学や恋愛、老人の生き甲斐といったさまざまな社会問題が描きこまれていた（川崎論文）。半田論文は、東京オリンピックを契機としてアスリートの「見られる身体」が前景化するとともに、欧米人に見劣りする日本人の身体を体育を通じて強化する試みが開始されたと指摘するが、前者はミニスカートの流行へ、後者は牛乳神話に結びつけて読むことができるだろう。実際、60年代

にロンドンから日本を含む世界へと広まったミニスカートは、富裕層を顧客とした従来のオートクチュールから、消費者として登場しはじめた若者を対象とする既製服への流れの中で登場したものであった。ミニスカートとともに、ファッションは身体を隠すのではなくむしろ見せるものなる（成実論文）。他方で、牛乳を飲むことで身体をアメリカ人並に頑強にできるとする神話が現実化するのには、乳製品の消費量が二倍以上に増えた60年代である。興味深いことにその立役者である雪印乳業の思想的バックボーンには天皇崇拜があり、ここではアメリカと天皇制とが牛乳において逆説的に結びつきながら日本人の深層を規定する事態となった（藤原論文）。「もはや戦後ではない」と言われた1956年を経て60年代の日本はこのように生活面で大きな発展を遂げていたが、国際関係に目を転じれば、それは例えば綿製品の輸出をめぐるアメリカとの交渉に見られるように、日本自体の国力の増大と相即するものであったのであり、その日本自身、香港や韓国、台湾などのアジア諸国との競争に晒される存在ともなっていた（籠谷論文）。

60年代は、経済的発展を背景として本格的な消費社会が到来するとともに、ベトナム戦争やアフリカ諸国の独立に象徴されるように世界が多極化した時代でもあった。各国であらたな主体として登場した若者たちは——学生数はこの時期大きく伸張する——、こうした世界的変化の中で意味を失いつつあった旧来の価値観に強く反抗する。パリ大学ナンテール校に端を発し、歴史的規模のストライキへと展開した「五月革命」はそうした異議申し立ての行動として記憶されることになる（白鳥論文）。若者の変化はこれだけではない。旧来の男女間秩序が揺らぎ、日本においても「ふたり」でならんで歩くことが可能になるだけでなく、いわゆる婚前交渉に関しても許容度が上がっていく（斉藤論文）。こうした若者に対して保守的な「大人」の側は、例えば

65 年の中教審の答申にあわせて出された高坂正頭の『私見 期待される人間像』に現れているように、旧来の価値観をなんとか説得的に示そうとするが、国家を基礎づけるものとして高坂が示す「愛」はすでに「マイホーム」的相貌を帯び、時代の刻印をやはり受けずにはおかない（前川論文）。

60 年代は人間性の解放や権力の批判という点で現在につながる強いインパクトを与えたが、そこには「前衛」に対する「後衛」の立場もあり、また前衛の肯定面に対する否定的な側面も存在していた。反抗を試みた多くの若者はその後社会秩序に順応する方向へと向かっていくが、しかし例えばボブ・ディランはいつまでも自己の違和感に忠実に歌いつづけた（ラショール論文）。これに対して、この時代の解放の神話は、現在であれば幼児に対する性的虐待と捉えられかねない行きすぎた行為をあまりにも無邪気に肯定してもいた（ジェスマン論文）。われわれはつねに物事の両面を見なければならぬのだろう。カーソンの『沈黙の春』（1962）が告発する化学物質が人間の肉体を蝕む一方で、同時期には宇宙空間で生きていけるよう薬物の力をかりて人間を「サイボーグ」化する計画が NASA で進行していたというのだ（遠藤論文）。薬物とのつながりでいえば、60 年代までにはらい病は薬で完全に治癒可能なものとなるが、病の痕跡をとどめる患者の身体はその後社会の片隅でいわば不可視のものとして生きていかざるをえなかった（田中論文）。またこの時期、薬物治療の発展のおかげで軽症化した「分裂病」患者が自己の内面を語りだすようになるが、分裂病はその時はじめて医者がゆっくり

と考察できる哲学的な省察の対象になったのである。いまだ記憶に新しい木村敏らの議論はこうした背景をもつものでもあったという（北垣論文）。

こうしていくつかの補助線を引きながら本書を読み進めてみると、それぞれの議論が相互に関連しているのがよく分かる。神の視点をもてるならその連関性を一挙に把握することも可能であろうが、人間にはもちろんそんなことはできない。60 年代は、多くの年月が過ぎてから見れば、20 世紀のたんなる一時期にすぎなくなるのかもしれないが、しかし冒頭で見たように、近代の終焉が自覚された時代、つまり山室論文が述べているように「奔流」と「逆流」が複雑に絡み合う時代でもあった。その錯綜したありようはこの山室論文がきわめて見事にまとめてくれているが、それでもやはり見通しが完全には立たないことにはかわりはない。電子メディア時代を先駆的に論じたマクルーハンを取り上げる富永論文が強調したように、この時代には「モザイク」という言葉がふさわしい。モザイクである現代社会を考えたマクルーハンはモザイクのように断片を集積した文体を用いた。モザイクの 60 年代を考えるためには、あるいは複数の歴史を思い見るためには、われわれ自身の知性をモザイク化していく必要があるのかもしれない。そして、いまだかつてない混乱の中にある現在の世界をすこしでも理解しようとするなら、自己の知性をこのように変形して 60 年代について考えてみるのも意義のあることであろう。そうした営為を本書はまちがいなく助けてくれる。